

NHK 人類の宿命「アルツハイマー病に挑む」を観て

3/5/2013

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

今回は、脳が委縮し、記憶力や判断力を次々と奪っていくアルツハイマー病に挑んでいる医科学者の様子をNHK/BSプレミアムからご紹介します。[2/28/2013 放送]

番組では、日欧米の医科学者の奮闘ぶりが紹介されていました。その中のひとつの研究では、アルツハイマー病は、病気が発症する20年以上も前から脳に変化が現れていることがわかったのです。我々の記憶力や判断力の低下した段階の治療より、もっと以前からの予防対策で防げるということなのです。

さて、アルツハイマー病の原因は「アミロイドβ」というたんぱく質が脳に大量に凝集されることで発症することが判りました。また、遺伝的な要素もあり「家族性アルツハイマー病」と言われる人もいます。その家族性アルツハイマー病の遺伝を持った人に披験者になってもらい、「アミロイドβ」を取り除くことに米国のワシントン大学ではチャレンジしています。その検証期間は2年間を要するようです。

このような、実証実験計画に米国政府は財源を確保しており、昨年、オバマ大統領は「2025年にはアルツハイマー病の治療と完治」を目指すという国家プロジェクトを発足させました。

また、米国の別の大学では、「インスリン」を使用したアルツハイマー病の臨床試験が始まったということです。インスリンは、糖尿病の治療薬で有名ですが、脳は糖による影響が大きいものの、脳の中にはインスリンが正常に機能していないことがアルツハイマー病の原因ということがこの5年間の研究でわかってきました。そのため、鼻から吸引する形で脳に直接インスリンを送る披験を行っているのです。その結果、記憶力の改善と人と機能の低下を防ぐことに成功しています。2013年中には最終段階の臨床試験が終わる予定とのことでした。

また、フランスでは、「血管」の改善を図ることでアルツハイマー病の進行を改善したことが報告されていました。これは過去の治療データを分析したところ、高血圧や動脈硬化の治療をやっていない人より、やっている人の方が認知機能の低下が少ないことが判ったということなのです。つまり、「血管」を改善することでアルツハイマー病になりにくいことに気付いたのです。

これに似た日本の実証では、「脳血流」の低下による記憶力の低下が見られているようです。高齢になると記憶をつかさどる海馬が委縮することは知られていますが、脳血流の改善で海馬の委縮を遅らせることができるというものなのです。

また、米国の大学では、「衰えている脳を再生」する実験が試みられています。これは、「運動」が脳に及ぼす影響を調べているものです。実際の研究では、1年間ウォーキングすることで記憶をつかさどる海馬を大きくすることができたとのことでした。薬に頼ることなく、自分の身体を動かすことでアルツハイマー病を予防できることが実証されました。

これと似た研究として、日本の国立長寿医療センターでは、独自の運動で「記憶力」がアップしたことを実証しました。それは、軽く汗をかく程度と脳に負荷をかけながら行う運動です。脳に負荷をかけるとは、運動しながら、ある一定の引き算等をおこなうというものです。6 ヶ月が終えて、記憶能力がアップし、認知機能の低下を防げたということです。

番組を見て、10 数年後にはアルツハイマー病の完治ができることに希望を抱き、自分と家族がそのようなことがないように祈るだけでなく、自分でできることつまり「運動」に積極的に取り組んでいく姿勢が大切だと思った次第です。

以上